

日本沿岸のチゴダラ類再考

°張 成年・柳本 卓（水産機構中央水研）・松崎浩二（ふくしま海洋科学館）・小藤一弥（茨城県大洗水族館）・星野浩一（水産機構西海水研）

【目的】我が国沿岸で漁獲されるチゴダラ類はチゴダラ (*Physiculus japonicus*) とエゾイソアイナメ (*P. maximowiczi*) が殆どである。両種間には不連続な形態形質が存在せず、生息水深（前者が 150-650m 付近、後者が数 10m 以浅）が異なるとされているが、水産物としては一般的にドンコと称して区別されずに扱われている。体色や眼径にも差異があるとされるが個体変異が大きい。本研究では日本沿岸で漁獲されたチゴダラ類について塩基配列分析及び形態観察を行った。

【材料と方法】使用したチゴダラ類標本の漁獲場所と水深は、岩手県大船渡沿岸（80m 深）、福島県小名浜堤防からの釣り（10m 以浅）、茨城県久慈沖（350m 深、450m 深）、茨城県大洗港堤防での釣り（6m 以浅）、茨城県鹿嶋沖（350m 深）、神奈川県荒崎沖（200m 深）である。mtDNA の D-Loop (CR)、16SrDNA、COI 遺伝子の部分領域の塩基配列を決定した。また、体色及び眼径についても検討した。

【結果】漁獲深度から大船渡沿岸、小名浜堤防、大洗港堤防標本がエゾイソアイナメ、その他がチゴダラと予想されたが、全個体で眼径は吻長の 2/3 以上、体色は淡褐色であり、チゴダラに符合した。個体間の塩基置換率の平均と標準偏差ともに小さく、16S 領域で $0.18\pm 0.15\%$ 、COI 領域で $0.81\pm 0.59\%$ 、CR 領域で $1.67\pm 0.73\%$ であり、浅場と深場標本間で特異的な塩基置換はなかった。3 種の領域ごとに作製した系統樹でも異なる地域や漁獲深度標本が別のクラスターを形成することはなかった。今後、漁獲深度ごとの標本数を増やし、形態的に典型的な差異を示す個体の分析を進める必要がある。